

3年『故郷』

——作者に影響を与えた絵画作品を鑑賞し、本文と比較して読みを深める——

○単元・教材の目標とポイント

【単元・教材の目標】

- ・複数の作品を比較して理解したことを、今までに身につけてきた語句を用いて伝える。
〔知識及び技能〕(1)イ
- ・作品と資料に触れて「希望とは何か」について考えを広げ、自分の意見をもつ。
〔思考力, 判断力, 表現力等〕C読むこと(1)エ

【単元・教材のポイント】

魯迅が『故郷』を執筆するうえで、そのベースとなったと思われるのはロシアのエフゲニー＝チリコフ（1864・1936年）による『田舎町』である。魯迅はチリコフの作品2編を翻訳しているが、その訳者附記として「彼の作品は、いささか深い思想に欠けるとはいうものの、率直で、生き生きとして、新鮮である。」（『魯迅「故郷」の風景』藤井省三 平凡社 1986）と書いている。二つの作品はプロットに多くの共通点を含むものの、魯迅により大きく改められているのは末尾における「希望」についての考察である。『田舎町』には無い「深い思想」を補うものとして『故郷』の成立があったと考え、教材として「希望」の論理に焦点を定めて扱いたい。

そのため、1点の絵画作品を追加資料として使用することにした。単元の流れは2段階とし、第一次では『故郷』本文をもとにして「希望」のあり方を読み取り、第二次では追加資料を考え合わせ、生徒自身による捉え直しを経て、「希望とはどのようなものか」を書いて発表することとする。

〈言語活動のポイント〉

追加資料として、イギリスの画家 G=F=ワッツ（1817・1904年）の絵画『希望』を使用する（P. 3参照）。

これは、魯迅が刊行を予定していた雑誌『新生』の表紙として予定されていた作品である。目に包帯をした女性が球体に座り、一本の弦が張られた豎琴の音に耳を傾けている。魯迅は己の「希望」のありさまについて共感を得て、雑誌の顔ともいえる表紙画に選んだと考えられる。この絵画をよく生徒に観察させ、その特徴や表現されているものについて意見の交流を行う。そして『故郷』に表れた希望の論理と比較しながら「希望とはどのようなものか」について自分の考えをもつことを目標とする。

この活動は、学習指導要領の〔思考力, 判断力, 表現力等〕C読むこと(1)エに対応し、自分の考えと文章に表れたものの見方、他者の考えとを比較することによって、より広い視野をもたせるために行う。生徒は物語の筋を追って「誰に何が起こったか」を理解することはできるものの、抽象的な事柄を理解したり表現したりする機会に多くふれてはいない。文章を読んだうえで、特に自分と社会との関わりについて考えを広げ深めるためには、受容したイメージを自分の言葉にして伝え合う経験が必要である。

まずは絵画から感じたことを自由に話し合うため、作品の表題を隠して生徒に題名を考えさせる。その後、題名と魯迅との関わりを知らせて「魯迅はどのようなところに『希望』を感じてこの絵を選んだか」を話し合わせる。最後にまとめの学習として、絵画と『故郷』の記述とを比較しながら、生徒のおのおのが希望について考えたことをまとめる。その際、もう一つの追加資料として魯迅の散文詩『希望』（『魯迅文集2』竹内好訳 ちくま文庫 1991）を提示する。この詩には『故郷』とは別の言葉で「希望」のあり方が表現されているため、理解の助けになると考えられる。

○評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・ 絵画『希望』と『故郷』とを比較しながら、魯迅の考えた「希望」とはどのようなものか、自分の言葉に置きかえている。	・ 絵画『希望』と『故郷』から考えたことを生かして、自分にとっての「希望」について考えを広げている。 C読むこと	・ 絵画や文章から得た自分の考えについて、積極的に話し合っている。また、話し合いで得たことを生かして意見をまとめている。

○学習指導計画（全 6 時）

時数	学習活動	評価基準
1	○本文を読んで初発の感想をまとめる。	◇物語の展開を正しく捉え、自分の抱いた思いを表現しようとしている。
2	○故郷に帰ってきた「私」の気持ちと閩土の思い出がどのような価値をもっているかおさえる。	◇生徒各自の幼少期のできごとを思い出させ、「私」の思い出と比較しながら話し合って考えを広げている。
3	○閩土との再会について、「私」の心境を読み取る。	◇少年時代の二人の間柄と比較しながら、何が二人の間を断絶させたのか、考えをまとめている。 ◇閩土の内面が少年時代とどのように変わったか、その原因は何か話し合い、考えている。
4	○「私」の抱いた希望とはどのようなものか、本文から読み取る。	◇「手製の偶像」「新しい生活」などの意味を自分の言葉に置きかえながら、私の抱いた希望について考えている。
5	○絵画作品『希望』を見ながら、魯迅の抱いた希望について考えをもつ。	◇本文と絵画の表現を比較しながら、魯迅がどのような思いを抱いていたか、意見を交流している。
6	○自分にとって希望とは何か、考えたことをまとめる。単元の内容を振り返る。追加資料として魯迅による散文詩『希望』を提示。	◇希望とはどのようなものか、どうすれば実現するのか自分の言葉でまとめている。 ◇初発の感想を読み返し、また他の生徒の考えを聞いて、自分の考えがどう変わったか振り返っている。

○本時の展開（5 / 6 時）

【ねらい】

- ・ 魯迅が雑誌の表紙に選んだ絵画作品と『故郷』本文を比較しながら、魯迅の抱いた希望とはどのようなものか、考えをまとめる。

【追加資料について】

藤井省三は『魯迅「故郷」の風景』で、G=F=ワッツの『希望』と、魯迅が散文詩『野草』の希望の章で引用したハンガリーの詩人ペターフィの「絶望は虚妄だ、希望がそうであるように！」（前掲書『魯迅文集 2』）との共通点について論じ、「魯迅にとってワッツの『希望』とは、ただ一絃残った琴糸のごとく、ほとんど求められぬ詩人の声を耳にせんと沈思する己の自画像であったのではないだろうか」としている。絶望を虚妄（うそいつわり）ではないかと疑うことで、絶望によって一度否定した希望を二重に否定し、その結果として希望が現れてくる。希望を一度否定することによって、さらに大きな希望のありかを示唆する『故郷』の構成に重ねさせることで、生徒の思考の深まりを促したい。

○本時の展開例

学習活動（・は予想される生徒の反応例）	指導の留意点	◇評価基準
<p>1 『故郷』結末部分を読み返し、「希望」の表現について確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人で思っても叶わないことが、大人数で目ざすと叶う。 ・道を最初に切りひらく人が必要だ。 <p>2 本時の課題を示す。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>魯迅が雑誌の表紙に選んだ絵画作品と『故郷』本文を比較しながら、魯迅の抱いた希望とはどのようなものか考えよう。</p> </div> <p>3 絵画を提示し、その題名を自由に考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・処刑を待つ人ではないか。 ・自由を奪われた人 ・悲しみ <p>4 絵画の題名を示し、「なぜ魯迅は雑誌の表紙にこの絵を選んだのか」についてグループで話し合いを行う。</p> <p>(1)絵の表現の特徴に注意しながら、『希望』という題名がついている理由について意見を出し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・堅琴に一本だけ弦が残っているのは、実現する可能性の少ない願いにすぎない人の感情を表現しているのではないか。 <p>(2)『故郷』における希望の表現と比較を行い、魯迅がこの絵を選んだ理由について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目隠しをしているのは人が社会に生きるうえで受ける束縛を表し、閩土や私が問題解決のすべを見失っていることに通じる。 <p>5 他のグループの話し合った内容について発表を聞き、本時の内容を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作者が影響を受けた作品にもふれる大切さを感じた。 	<p>○本文を読み返し、「私」が次の世代に新しい生活を送りたいという希望をもっているながら、故郷の人々との断絶を経て、その実現に自信をもてなくなっていたことを確認する。</p> <p>○魯迅が影響を受けた他の作者の、他ジャンルの作品に注目しながら本文を読み解く手がかりにすることを確認する。</p> <p>○絵画を印刷したものをグループごとに配布する。伏せておいた題名を予想させ、自由に話し合う雰囲気作りをする。</p> <div data-bbox="735 927 1145 1438" style="text-align: center;"> </div> <p>▲ワッツ『希望』1886</p> <p>○絵を見て気づいた表現の特徴と、それが意味することを考えて話すよう指示する。</p> <p>○(1)で考えた絵の特徴について、『故郷』の作品内のできごとや表現と比較して共通点や相違点を探らせる。</p> <p>○グループの話し合い内容を代表者がまとめ、その発表を聞いて思ったことをまとめるように指示する。</p>	<p>◇本文を読み直し、表現されている「希望」について自分の言葉でまとめられている。</p> <p>◇絵の雰囲気や特徴から題名を考え、グループの生徒と意見を交流している。</p> <p>◇絵をよく見ながら表現の特徴に気づき、題名との関連を考え意見を出し合っている。</p> <p>◇絵の表現と本文の内容とを比較し、トピックを見つけて話し合っている。</p> <p>◇本時の学習をもとに自分の考えをまとめている。</p>

○授業の成果と課題

【追加資料の選択について】

今回の単元で使用した追加資料は、絵画作品『希望』と、この単元の最後の授業で紹介した魯迅による『野草』の中にある散文詩『希望』である。後者は詩全体ではなく、ペターフィの引用である「絶望は虚妄だ、希望がそうであるように」について読み取らせることに重きを置いた。生徒が絵画について考えたことと重ね合わせて、魯迅の「希望」像を理解する助けとなると考え、教材として利用することを決めた。

本文の内容理解を深める手立てとしては、同じ作者による別の作品に目を通すことが有効である。しかし選択する作品によっては、生徒は何のために読んでいたのか、どの作品がどのように大切なのか混乱を来たす危険性もあるといえるだろう。加えて、特に魯迅という作家の場合は、文章の長さや題材の内容からも補助資料としての教材には適さないものも多い。

そう考えると、他の作者による他のジャンルの作品の影響を考えることは、本文に表れた「希望」について別の視点から理解を深める手段として有効であるといえるだろう。生徒は絵を見て自由に発想した事柄について活発に意見を出し、また『故郷』の内容との共通点も発見することができた。以下に示したのは授業内での、話し合いをまとめたノートに書かれていた内容である。

- ・ 絵の中の楽器は弦が何本も切れていて、これは「私」が故郷の人々に感じた断絶のように、心が折れそうになっていることを表していると思う。それでも一本だけ残った弦に願いをこめて、希望を忘れずに生きればいつか実現するというのではないか。

絵画のテーマを魯迅がどのように受容したか、生徒の言葉でまとめられている。また、抽象的な事柄について理解し、自分の言葉で表現することを苦手とする生徒にとっても、本単元において「希望」というテーマに向き合い、話し合いをして他の生徒の考えにふれる機会をもつことができたのは有意義であったと思われる。

【単元のまとめと振り返りについて】

最後に、生徒がこの授業を踏まえて書いた「希望とはどのようなものか」という文章の抜粋を紹介したい。

- ・ 魯迅は、絶望を経験した果てにしか希望はないと考えていた。そして、その希望は、民衆の一人一人が自分の生活に結びつけて、理不尽なことがあっても変えられると信じなければ叶わない。私たちの住む社会にも格差や差別があるが、それを克服できると信じなければならぬと思った。

また、初発の感想との比較では以下のような意見があがった。

- ・ 最初に読んだ時は、希望の道を最初に作る人が誰か現れて、みんなが続いていくような「他の人頼み」だと思ったけれど、そう思ってしまうと、いつか誰か叶えてくれるもので、手製の偶像とあまり変わらない。希望の実現をする一歩として魯迅は小説を書くことを選んでいると思う。

生徒が他の作品と出会い、また話し合いを通じて考えを深めたものと思われる。ジャンルにとらわれず生徒の学びを引き出せる資料を探し、実践に役立てていきたい。